雲」全8巻を長年繰り返し読み、満州―松山に思いを馳せている。

『追記』この後、父君の戦死の地を訪れ、最近無くなった母君の分骨を父君の近くに埋めるために満州を訪れた伊東良太君は、そのあと訪れた奉天、大連、旅順で撮った多くの写真を下さった。その中には、奉天二中、旧宅あと、旅順工大、旅順高校、日露戦跡などがある。(「砂丘」1998)

「一外地転入生の松高生活」

私の松高生活は縦糸が理科三組の教室における生活だとすると、横糸は寮と下宿および音楽部の生活であったといえる。いずれも恩師と先輩、友人がその中心であって、三年間の松高生活が、いろいろな意味で現在につながっている。私の松高生活が友人たちのそれと別の意味をもっていたとすれば、それは私が満州からの引き揚げ転入生だったという事実によるところが大きい。一年の時のクラス担任だった西洋史の村瀬興雄先生には二年生以後私の指導教官としてお世話になった。一年の時の指導教官、植物学の小野記彦先生は名古屋大学に移られ、後任に仙台から来られた宮本義男先生には私の一生を決定する影響を受けた（この点については別に記したので省略する)。これら三先生、それに大学卒業後も論文のドイツ語でお世話になった三好助三郎先生とは現在でもご厚誼を頂く栄を得ている。理科一、三、四組の級友であった石川登、岩瀬正臣、中田高義、真鍋礼三、薬師寺春雄、坂和愛幸らの諸君とはいまでも行き来が続いている。一年の時の寮生活で苦楽を共にした文乙の根矢学、理科三組の河野正の諸君、一級上文乙の松本恭輔さんらは忘れ難い友人たちである。根矢君は京大法学部、私は理学部へ進んだが、京大生時代、そしてその後実社会へ出て長年たった今も高校生気分でつき合ってもらっている。音楽部では毎年秋の定期演奏会でOBや部員、それに応援演奏のお嬢さんたちとハイドン、モーツァルト、シュトラウスなどを楽しく演奏した思い出がある。以下、横糸である寮、下宿の生活を中心に一引き揚げ転入生の松高生活を振り返ってみたい。

1. 転入学試験

焼け残りの松高で転入学試験を受けたのは昭和22年2月のある寒い日であった。前日、丸亀から予讃線に乗って松山に着き、道後に一泊して翌朝、持田へ行って驚いた。講堂と一部の教室を残して何もない松高を見、もし入ったらどこで授業を受けるのかといぶかった。

転入学試験の出来は散々で、戦時中の中学時代の勤労動員の明け暮れ、終戦後の混乱と引き揚げなど、不勉強の結果とはいえ、まずは不合格と覚悟した。一教室に、いろいろな外地学校の制服を着た受験生3－40名が学年別の転入学試験を受けた。試験課目には数学、英語、ドイツ語などがあったが、最後は作文（自由題）であった。引き揚げ後、外地の高校、大学予科在籍の私たちに対し文部省から通知があって、引き揚げ学生の収容可能数は各校とも少数であるから、できるだけ多くの高校で転入学試験を受けよ、とのことであった。私はどうせ不合格だろうし、このさい率直に訴えておこうと思って次のように書いた。「引き揚げ者は上陸地（私の場合は舞鶴）で一人千円しか交換してもらえず、以来お金に困っている。汽車に乗るにも切符を買うのが大変で、しかも超満員の汽車に乗って空腹をかかえて旅をするのは困難である。また宿賃も大変な負担である。だから、なるべく多くの高校を受験せよというのは引き揚げ学生に

とっては全くの難題で甚だ困る。たとえば統一試験を実施して、それぞれ近くの高校で一回だけ受験すれば良いようにしてほしい」と。結果は翌朝発表される筈だった。

道後の宿にもう一泊し、翌朝、丸亀へ帰るため宿を出た。どうせ不合格だろうと諦めていたものの、やはり結果を確認しておきたいという気になって念のため持田へ寄ってみることにした。掲示がまだ出ていなかったので立ち去ろうとしたとき、一人の先生が出て来られ、私を呼び止めた。受験番号をきかれたので答えると、「君は合格しています。入ったら大いに勉強して下さい」といわれた。あとで知ったが、この先生は当時教頭の井手淳一郎先生だった。結局、理科一年の合格者は9（10？）名中2名で、私のほか、満州医大予科から受けた梶田穣君が合格した。

昭和20年3月、私たちは中学四年修了のまま卒業という臨時の措置で勤労動員に明け暮れた中学とおさらばとなった。私たちは上級の学校に入ったものの、ろくに授業も受けないうちにソ連の満州侵入、そして終戦という激動にほんろうされることになった。奉天二中から旅順工大予科興亜寮の短い生活、奉天へ帰宅、その後約一年間にわたる混乱の中での敗戦国民としての生活、そして引き揚げ後の経済的困窮に追われる生活、と続いた。奉天や旅順の級友たちのうち、相当数の人たちが生活のために学業を放棄したのを私は知っている。運はまさに紙一重で、もし松高の転入学試験に落とされていたら、私の人生は大きく変わっていたであろう。

2. 三津浜分寮の生活

三光寮三津浜分寮への入寮許可が届き、昭和22年4月はじめ、愛用のアマティー型楽器を抱えて三津浜へ行った。図書館二階の大広間をあてたこの分寮は15、6人の寮生が四人ずつ住めるよう簡単に仕切ってあった。その日、新寮生が三々五々到着し、夕方歓迎会が開かれた。私の記憶では、上級生は理甲三年の多田進、文乙二年の松本恭輔、奉天一中から入っていた理甲二年の大井健次、それに旗生朗の四氏で、残りはすべて新入生であった。

私と同室は寮長だった松本さんのほか、大阪の市岡中学から入った文乙の根矢学君、大分の竹田中学から入った理科三組、つまり私と同級の河野正君であった。秋になってこの分寮に旅順高校から理科二組に転入学した中村昭三君と文甲に転入学した高岡義雄君および大橋正也君が入ってきた。一年間の三津浜分寮暮らしはとにかく“腹ペコ”の一言に尽きる。伊予鉄三津から松山駅、そして市電城北線で南町、あるいは城南線で御宝町へ、それから歩いて持田の寮ホールで食事、さらに歩いてクリーニング屋さんの仮教室へ、という毎日は通うだけで腹から力の抜ける重労働であった。そのうえ、かの有名な”相原殺人体操”に鍛えられたことはいうまでもない。ホールの食事はナンバ粉のパンやふかしサツマイモなどが三度三度で、スイトンが出たときは嬉しかった。やせた小さいサツマイモのふかしたのが四－五本皿に乗ったものが三度三度の毎日では、腹が滅っていても喉を通らない。一本食べて残りをポケットに入れて教室へ行き、授業中にまた一本食べるという有様で、私のサツマイモアレルギーは食料事情の良くなったあとも長年続いた。一時はとうとうデンプン含有食が配給されなくなり、米軍放出の黄色いザラメが食事代わりに支給された。べんとう箱に入れた黄色いザラメを寮に持って帰り、ハガキを二つ折にしてザラメをすくい上げ、口へ運びながら読書をした。当時の私にとって親類のT嬢の手紙とアマティーは唯一の慰めのような気がしていた。もっとも、私の下手なアマテ

ィーの音色（雑音）は腹ペコ寮生たちにとって大迷惑だったろうと、今でも気の毒に思っている。

三津浜から松高へ通うだけでエネルギーを消耗するので、そのうち河野君と契約ができ、朝、寝床の中でジャンケンし、負けたほうが松山へ行って寮の食事を飯盒で運び、代返をするということにした。寮ホールの食事では勿論足りないので、寮生はあらゆる努力を払って食い物の補給をした。半煮えのコムギ、電極パンなどを思い出す。味より腹を充たしたい一心の毎日であった。ガールフレンドも何か食わせてくれそうなメッチェンを選ぶありさまで、「花より団子」というわけだ。寮の隣は病院で、寮雨に文句を言われると寮長が謝りに行った。ところがこの寮長は大変モテており、隣の看護婦さんに招ばれたりして寮生から羨ましがられていた。空腹の他、我々寮生の勉学意欲を妨げたのは、ひんぱんな停電であった。ザラメを食事代わりに口に放りこみながら行ったローベンの辛さは忘れられない。しかし、時には近所の喫茶店（美しい姉妹がいた）で一杯のコーヒーでねばって駄弁ったり、海岸を散歩したり、あるいはゲーテ、ヘッセに酔ったり、また秋には寮祭を開いたり、ひもじい中にも楽しい時は結構多かった。

私と一緒に転入学した梶田君はたしか理科一組で、道後駅の裏手に下宿していた。二人とも何となく学校、というよりは“内地”になじめなかった春頃、学校の帰りによく彼の下宿で駄弁った。大連出身の梶田君は旧自宅の写真を机に飾って望郷の念にかられているようであった。二人で飽きもせず大連、旅順、奉天の話しをしては満州へ帰りたい帰りたいと連発していた。夏が近づいた頃、梶田君は急に松高をやめると言い出した。そしてろくに相談もせぬうちに彼は松山を去った（八幡浜に健在ときいている）。梶田君に続き、旅順工大で同級であり、松高で一年上級にいた妙田俊夫君も夏、あっさりと北大予科に転学してしまった。淋しさの余り、私は満州時代の友人が多くいた東京の高校、あるいは満州に似た気候風土の北海道にある北大予科に移りたい気持ちを抑え難くなり、夏休み前に松山を離れてしまった。松山にはかえらぬつもりであったが、転校の計画はうまくゆかず、秋と共に帰寮した。実に幸いなことに、この年は食料事情のため夏休みが早く始まり、一学期の試験が九月に延期されていたので、私は試験を受けることができた。秋には転入試験が再び行われ、私と同じ旅順工大予科から佐々木恭輔君、旅順高校から木原彊君、吉田極君、前述の中村昭三君、高岡義雄君、大橋正也君らが入り、心丈夫になってようやく私も松高に落ち着いた。

3. 寮から下宿へ

危うく私が二年生へスベリ込みセーフで進級するとともに三浜分寮が廃止と決まった。一時、寮ホール裏の日本間を仮寮とし、持田のバラック三光寮にいずれはいるという話しもあったが、沙汰止みとなり、三津浜分寮生は下宿生活に入った。この頃、持田に粗末ながら木造新教室が建ちはじめ、クリーニング屋さんに行かずに済むようになった。そして寮ホールの食事も少し改善され、スイトンや雑炊が多くなった。私は旧寮長の松本恭輔さんと鉄砲町のS家二階に下宿することになった。しかし数ヵ月後、都合で道後のH家二階にまたまた松本さんと移った。この頃、同郷（奉天）のR嬢と知り合い、松高生活二年目はよその家庭の雰囲気にも触れながら、人間らしい生活を送れるようになった気がしはじめた。松山城の国宝筒井門が放火によって焼けたのはこの頃で、松本さんの去ったあと移ってきた理科同級の佐々木恭輔君および清水岩幸君とH家の屋根から筒井門の焼けるのを眺めた。

その年、下級生として一年生が入ってきており、しかも進駐軍の指示によったそうで、文、理に一人ずつ女子学生が入ったというので皆大いに珍しがった。また、どうやら学制改革があるという話しが伝わり、アメリカ並みに六、三、三、四制になるらしいということがしきりに話題になった。このような変化は民主主義のためということで、この頃になって私たちもようやく敗戦の影響がいろいろな形で現われてきていることを改めて認識させられた。この年、東京裁判の判決がラジオで放送され、敗戦の実感はますます強まった。そのうち、先生たちが、私たちのクラスだけはどうやら旧制度のままで大学まで行ける可能性が高い。しかし、高校も大学も旧制最終学年になるから、うかうかして落ちこぼれたら大変だ、とおどされるようになった。私はこのような危機感をあまり持っていなかったようで、この頃は音楽部中心の毎日を送っていた。私の楽器の腕は相当な我流で、当時毎月神戸までレッスンに通っていた同級の笹木暹君とは比ぶべくもなかったが、何とかクワルテットや弦楽合奏をこなしていた。当時の仲間で文乙の吉田極君は旅順高校出身だったせいか親しくしていた。彼は音楽では天才で、すばらしいバリトンでシューベルトの歌曲を歌うだけでなく、ヴィオラを奏し、指揮もした。吉田君の「魔王」の歌声は今も耳に残っている。阪大法学部入学後は宝塚歌劇場の近くに下宿していた。

三年生になったある日、指導教官の村瀬先生が、「私の家に一間空いていますが、君来ませんか」と私に声をかけられた。私はその頃、そろそろ勉強に本腰を入れないと旧制を落ちこぼれるかもしれないと思っていたので、これも指導教官の御配慮かと大いに心が動いた。反面、四六時中先生や奥様の眼が光っている所で暮らすのもきゅうくつそうだ、と迷う気持ちもあった。しかし、大学で物理か生物学を研究したいという幾分かの勉学意欲に加え、美人のほまれの高い村瀬夫人を毎日拝見できるという魅力も大いに手伝って、とうとうグランド裏の村瀬先生宅に移り住むことになった。数ヵ月してもう一間空き、前に同居していた佐々木、清水両君までお宅に引っ越してきた。三年生のこの頃は食糧事情もかなりよくなり、ヤミ米も手軽に買えたし、魚のたぐいも行商で売りに来ていた。私たち三人は毎日炊事当番を順番で担当し夕食を一緒にしていた。しかし、献立は毎日印で押したように決まっており、七輪をおこして炊いた飯盒飯＋焼イワシ＋アサリの味噌汁であった。寮ホールで朝食、昼に昼食＋夕食の二食分、そして自炊の夕食という生活で、当時としては至極満足すべき食生活を送ることができるようになっていた。時には村瀬夫人心づくしの差し入れもあり、松高生活中、初の“食足り”た一年であった。この一年間、夕食後毎晩のように村瀬先生から伺ったフランス革命、ドイツ統一、あるいはナチズムのお話しは今だに耳に残っている。私が今でも専門書以外には世界史関係の一般書を好んで読むのは先生の影響といえる。村瀬先生ご夫妻のご鞭撻の甲斐あって、昭和25年春、私は希望どおり京大理学部植物学科に入ることができた。

むすび

本稿を書くに当たり、日本内地にこれといった故郷や拠点を持たなかった私は、多かれ少なかれ同じような条件におかれた級友たちと同様、当時20歳前後の食べ盛りで、辛く思い出すのは主として食べ物のことである。いわば色気より食い気が優先という、思えば悲しい、浅ましい面も多い高校生活であった。しかしその反面、今の世とくらべると、貧しい中にも夢があり、

希望をもっていた。フロインデインのR子さんやH子さんと寮歌を歌ったり、彼女らに将来の夢を語ったりしたものである。人間というものは物質的に恵まれない生活をするほうが、ある種の精神的高揚がおこり、かえってロマンティシズムや未来への理想を強く抱くようになるのかも知れない。私にとって全く新しい、そして、大陸とくらべてきわめて異質であった環境の中での松高生活三年間が、私の人生の中で殊の外凝集した中味をもっているという実感は35年経った今、かえって強くなっている。(松山高等学校同窓会「真善美」1984)

「M先生宅の下宿」

「君、僕の家に下宿しませんか。玄関脇の四畳半の部屋が空いていますから」と、三年進級を控えた昭和24年春休み前のある日、M先生に校庭で声をかけられた。東大文学部出身のM先生は西洋史を教える先生であった。当時三十代なかばであったろうか、白せき痩身、いかにも第一線の研究者という風貌であった。そして先生は理科生であった私の指導教官でもあった。

思いもかけぬ先生のお誘いに、私は戸惑った。下宿で先生と顔を合わせ、勉強せよとお説教されるのはかなわぬ。どうしたものかと数日考えた。友人たちは冷やかし半分に、「お前は見込みがあるからお声がかかったのだ。ぜひお宅に下宿しろ」などと言う。東京出身のご夫妻には子供がなく、先生より十歳は若い夫人は、まだ少女の面影を残した知的美貌の持ち主であって、当時の悪童高校生の間では評判が高かった。

私の高校、それは旧制の松山高校であった。なにかといえば漱石、子規、虚子が引き合いに出される土地柄、生意気盛りの松高生どもの話題に先生の奥様のことが出て、「坊ちゃん」のマドンナでもとてもかなわないだろうという評価であった。今にして思えば友人たちの本音は私に対する羨望だったにちがいない。

当時、多くの旧制高等学校では、入学すると、クラス担任のほかに生徒それぞれが「指導教官」をもつという制度があった。一身上のことでも相談に乗って頂くのがおもな目的ということであった。おそらくもっと重要なことは、スレスレの成績のときに、教授会で救済の弁護をしてくれるのが指導教官の役目である、という先輩からの伝授であった。そこで、多くの生徒は自分の苦手とする学科の担当教授に指導教官をお願いに行くということになる、と聞いていた。事実、多くの不合格者を出すことで有名な数学のある先生に指導教官を頼みに行く者がお宅に目白押しというありさまであった。私は、あまのじゃくの性向なのか、友人たちがあまり頼みに行かない教授に指導教官をお願いしようと物色していた。

もちろん、理科生で文系の先生を指導教官にもつ者は全くいなかった。私は、多少歴史に関心があったので、指導生をあまり持っておられなかったM先生にお願いしたところ、簡単に引き受けて下さった。以後、一年、二年の学年末が来るたびに先生宅に呼ばれ、「危うく落第するところでしたよ。もう少し勉強しなさい」と言われても、奥様のすすめて下さるお茶とお菓子を頂きながら、進級出来たのだからこれで充分と、先生のお説教をうわの空で拝聴していた。

このように、ごく一般的な指導教官と指導生の関係であったので、お宅に下宿せよという先生の真意を理解しかねた。要するに、指導教官としての責任を果たすため、この出来の悪い、ぐうたらな理科の指導生の尻を叩いて卒業させ、大学に合格させようとの意図によっている、